

テーマ：災害時における要配慮者への支援のあり方

～福祉・医療職養成機関における福祉避難所運営訓練を通して～

布施千草 清宮宏臣 根本曜子 山田美知代 窪谷珠江 平井敏一 藤田孝明 山口温子

I. 研究背景

昨今、我が国では、災害が多発している。災害時、要配慮者は福祉避難所に入所になる。それ故、福祉避難所には福祉・医療職の専門職を必要とされている。一方福祉避難所運営訓練に関しては自治体主体で実践している例があるが、教育機関として防災訓練は行うものの、特別支援学校以外は、福祉避難所運営訓練をしている所が少ない。養成期間中に訓練を実施し、災害時の援助者としての自覚を高める意義がある。

II. 研究目的と方法

1. 目的と方法

仮説拠点的福祉避難所運営訓練計画を本学の過去 3 回訓練での課題と被災前の生活に戻るためには避難所生活に何があるかの検討を加え作成する。その計画に基づき図 1 のように第 4 回拠点的福祉避難所運営訓練を実施し、その参加者の反応により福祉・医療職養成する教育機関での福祉避難所運営・訓練に必要な事柄を明らかにする。

2. 対象者と調査方法

仮説拠点的福祉避難所運営訓練を実施し、訓練参加学生・要配慮者に対しアンケート調査、研究者による参与観察法での結果分析を行った

3. 倫理的配慮

研究倫理に関しては、調査票は無記名とし特定されないことを説明し、調査票の回収をもって同意とした。植草学園短期大学研究倫理委員会で承認を得た。

III. 結果

1. 対象者の属性：

短大生 34 名，大学生 25 名 [回収率 66, 2%]，要配慮者 21 名 [回収率 90%]

2. アンケート結果

学生アンケートからは、訓練前の不安が強い。訓練後は自分達の課題に気づき、実体験から得ることが多いことが分かった。自分達の仕事を通じて、要配慮者への二次的障害予防に関心が深まった。1, 2 年生ともに行うことでリーダー・メンバーの役割の理解が深まった。

要配慮者アンケートからは、関わり方については、視覚障害者からは、何かする際の声かけの大切さ、場所の具体的な位置関係の説明不足の指摘はあったものの学生の対応に対しては高評価であった。知的障害者の家族からは避難生活が長引いた際に向けて自立支援への希望、援助を受ける立場としての心構えなどが聞かれた。肢体不自由者からは、薬、治療継続についての不安、現在の能力維持のための環境整備、訓練はあくまで訓練で、実際のことを不安視する意見があった。

IV. 考察

訓練を通して、要配慮者、家族は避難所生活を想像しつつ、復興に向けて悩み、援助を受ける者としての心構えをもっていた。福祉避難所運営訓練を行う際は、要配慮者・家族を交えての計画作成・訓練参加が有効である。将来学生が担う専門職の避難所での関わりを計画にとりいれ、訓練を行う。避難所生活は被災者の生活再建の場でもあるという意識をもって訓練に関わる。開設訓練から原状回復訓練まで行う。

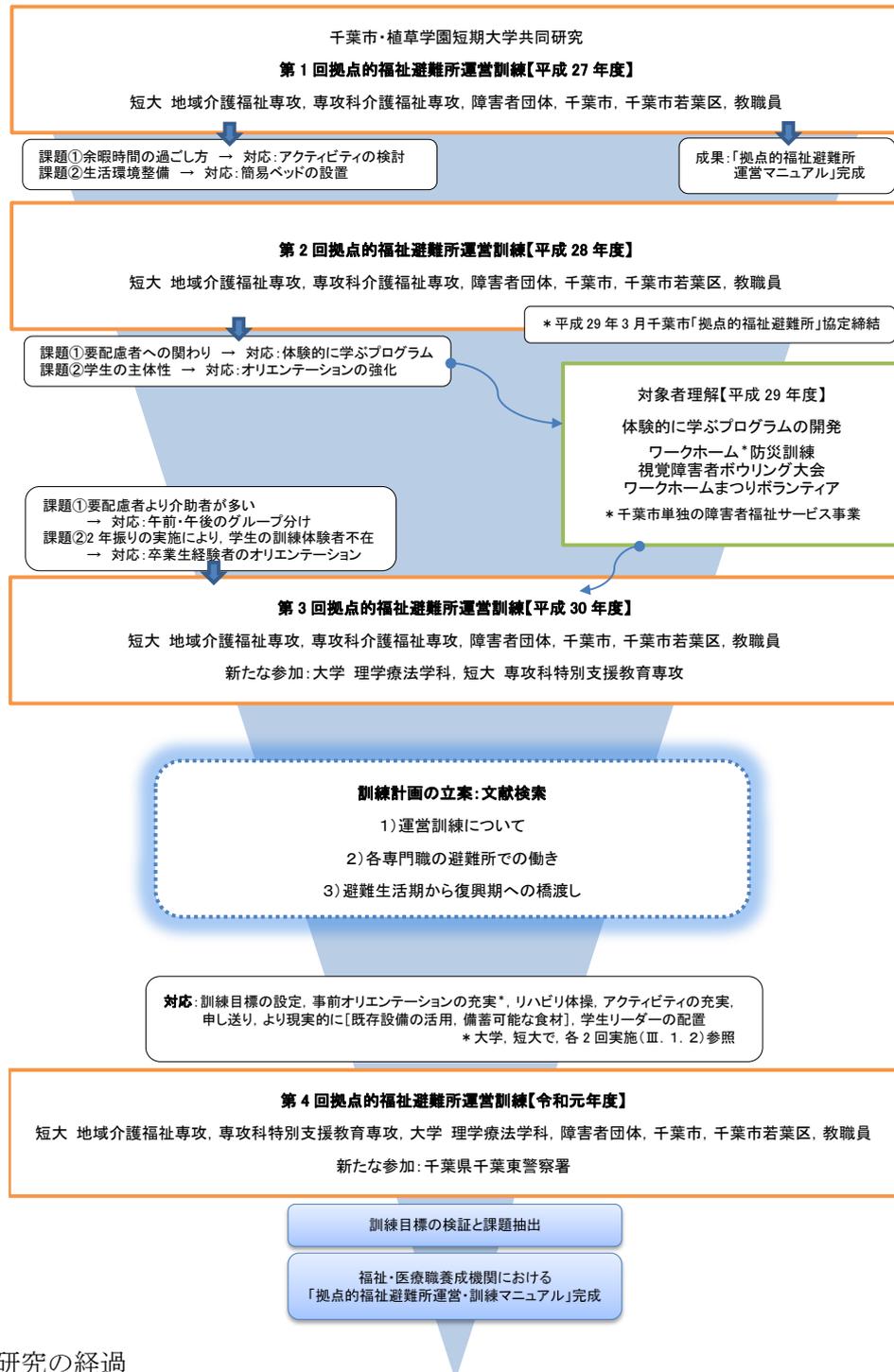


図1 研究の経過